

# 花一会図書館便り

2・3月号（令和5年3月1日発行）

【TEL&FAX】

0136-57-6085

【MAIL】

hanaichie@voice.ocn.ne.jp

花一会ホームページ



Facebook



Instagram



X (旧 Twitter)

第15回

## 「郷土探索への道 学校編④」 川上小中学校の歴史と黎明期 その2

### 学校がほしい！子ども達に学び舎を！

厳しい生活条件を克服しながら、総出で3キロ以上の長い距離をカンジキで雪踏み固め、運搬用の道つけを開始した。翌日には気温の低い朝のうちから大きな手櫓(てぞり)を前後に置いて長い丸太を運び始めた。一致協力して掛け声をかけながら…。開拓者の熱意溢れるこの行動が校舎建築の始まりだった。

### 昭和24(1949)年8月15日 開校

#### ～学年の設定 学校無縁からの教育開始～

大正3年に設立された学校が廃校になったまま自由奔放な生活をしてきた子ども達。戦後4年間、学校離れの満州・樺太引揚者、すでに義務教育終了の年齢を過ぎてしまっている者が多い状況、家事手伝いを重要視されて多忙になった者、「君はどんな勉強から始めようか」という話し合いが数日続き、年齢に関係なく子どもの意欲や能力等から一応の出発点“学年”を決めることが第一歩であった。正に千差万別な子ども達に向き合う初代校長の苦勞は筆舌に尽くせない。

昭和27年に中学校が認可され川上小中学校となった後は、校長ほか2名の教員により「3個学年複式」(小学1～3年、小学4～6年、中学1～3年)の学習形態となり、校長も常に授業者であった。修学旅行の実施、町内大会への参加等、学校が生き生きと活動する度に「学校をつくって良かった」という父母たちの充実感が伝わってきた。(裏面へ続く)



昭和25年3月 第1回卒業式(背景：墨汁を塗った手作りの黒板)  
義務教育終了年齢を過ぎた者は卒業。しかし、誰もがまだ通学を希望した。



一本橋の上に立つ子どもたち

遠くは6キロ以上の通学路。冬の一本橋は霜と雪の難所だが、待望の“学校”へ皆勤。



家庭では出来ない「七夕祭り」を楽しむ



**昭和33(1958)年6月 ↑**

全戸参加の運動会。活動出来る者全員が選手として疲れを忘れ、学校存在の意義を喜ぶ。近隣の立川や新富(豊浦町)からも参加して親睦を深めた。



←  
**昭和33(1958)年**  
体育館が新築。屋内での運動が可能になった。

**昭和35(1960)年8月 →**

第1回卒業式後に結成された川上小中学校同窓会は毎年開催され、一番の楽しみな行事となった。それぞれの活躍を語り合い励まし合い、隣接地域青年の参加にも広がった。



←  
**昭和36(1961)年5月**  
修学旅行実施  
中学生2名と引率教員1名が桂中学校に合流させていただき、奈良・鎌倉等…川上中学校初の修学旅行を実現。これを機会に文通等の交流が盛んとなった。



**昭和36(1961)年9月 校長会総会 ↑**

小学校13、中学校6の学校長と教育委員会数人が満載で川上小中学校を訪問。トラックの荷台で悪路に揺られ、遠距離に驚き、尻の痛さに耐えつつ、町内全体の学校事情を知る機会にしようとの考えがあったか？



**昭和43(1968)年 同窓会洞爺湖にて**  
子ども連れが多く、益々同窓会の価値が高まった思いがしていた。網走市から、高知県からも参加。更に再会を約束して…。

同窓会員が中心になって動き、全家族の集いをしたことも…。



平成14(2002)年の新富小学校(豊浦町)閉校後には、その卒業生も加え、苦楽を共にした全ての仲間として川上小中学校同窓会を「富川会」とした時期もあった。

送られて卒業し、送り出されて故郷を出たが、今は学校もなく、故郷もない。同窓会・富川会が“我が心のふるさと”と思う。コロナ直前までの70年間、同窓会を守り続けてきた事が多くの先達への「感謝の気持ち」。学校は心のふるさと…誰もが心の奥深く大切に…。